

はじめに——戦後沖繩「米留組」^{べいりゆうぐみ}と呼ばれた人々

一九五〇年、アメリカ独立記念日にあたる七月四日、沖繩の勝連半島^{かつれん}にあるアメリカ軍港「ホワイト・ビーチ」に、早朝から五〇名近くの沖繩の青年たちが集まっていた。

カメラの前に身を寄せ集合写真を撮る青年たち。足元にはスーツケース。アメリカ軍払い下げのHBT生地^じの軍服と軍靴を着けている者、また古い柳行李^{やなぎごうり}を肩に担いでいる者もいる。背後には、巨大なアメリカ軍用船が停泊し、船首には、「ジエネラル・ギャーフイー号」と船名がある。

見送りに来ていた家族や友人、恩師や村の人々に別れを告げ、青年たちは一列になり軍用船に乗り込む。出発を称^{たた}えるアメリカ軍のバンドの音楽が鳴り響く。

船の甲板は、除隊兵たちで混雑していた。岸壁に立つ人たちに手を大きく振る沖繩の青年たち。

別れのテープが色とりどりにはためき、軍用船がゆっくりと岸を離れ、いよいよ彼らの

アメリカへの出発が、夢から現実のものとなった。甲板は、安堵感と緊張感が入り混じった溜息で溢れていた。

去りゆく島影はだんだんと小さくなり、眩しい青空と大海原が広がっていた。

時速一九ノット、一万七〇〇〇トン級の軍用船ギャーファイ号は、沖繩の青年たちを乗せて出発した。最終目的地はサンフランシスコ。途中、マニラ、グアム、ハワイを経由する約二週間の旅である。

沖繩戦から五年が経ったこの年、沖繩の若者を対象にしたアメリカへの留学制度が本格的に始まり、朝鮮戦争勃発直後のこの日、沖繩の留学生がアメリカに向け出発したのであった。

太平洋戦争の末期、一九四五年三月下旬から六月下旬にかけ、沖繩島そしてその周辺の島々は、日米最後の地上戦の舞台となった。この戦争による戦死者数は、日米あわせて二〇万人以上にも及んだ。日本軍とアメリカ軍による組織的戦闘は、一般住民を巻き込み、多くの尊い命が失われた。住民の四人に一人が亡くなったとされている。

戦勝連合国による日本の占領は、一九五一年のサンフランシスコ平和条約により終わったが、沖縄島を含む南西諸島は、日本から切り離され、アメリカ軍政による直接的な支配下におかれた。

沖縄の住民による「限定的」な自治を認めるため、琉球^{りゅうきゅう}政府が発足したのが一九五二年。米軍の統治機関は琉球列島米国民政府（以下、軍政府）から琉球列島米国民政府（以下、民政府）と名を変えたが、占領軍が決定権を持ち続けるという支配構造は、沖縄の施政権が日本政府へ返還される一九七二年まで続いた。

一九四九年から、アメリカ陸軍省はアメリカ政府の軍事予算を用いて、沖縄の若者を対象にアメリカの大学で学ぶための奨学制度を実施した。一九四九年の選拔者はわずか二名であったが、一九五〇年には五三名、五一年にも五三名、五二年は七六名と、年々増加し、より多額な金額が割り当てられた。アメリカ陸軍省資金によるこの留学制度は、一九七〇年が最後とされたが、毎年、少なくとも二〇名、多い年には九〇名近くの沖縄の若者が大学で学ぶためにアメリカへ渡った。

戦後の沖縄社会において、米留学制度は「米留」制度、そして米留学経験者は「米

「留組」と呼ばれ、合計一〇四五名の沖縄の若者がハワイやアメリカ本土へ渡り大学教育を受ける機会を得た。学士号一五五名、修士号二六二名、博士号二八名の計四四五名が学位を取得した。

アメリカに留学した者たちを指す「米留組」という呼称は、アメリカ統治下の沖縄を生きたる人々にとって、特殊な眼差しまなざしや感情を表現するものであった。

特に、日本への復帰運動が激しさを増す一九六〇年代の沖縄において、「米留組」に対する風当たりは厳しく、「向米一辺倒」や「米軍の親衛隊」と呼ばれた。つまり、「米留組」という言葉には、政治色を帯びたステレオタイプが含まれていたのである。

「米留」制度は、アメリカ陸軍省が管轄し民政府が実施した。最初はガリオア基金として知られる占領地域救済政府基金 (Government Appropriation for Relief in Occupied Area Fund) から始まり、その後はライカム基金 (琉球軍司令部基金、Ryukyu Command Fund) やアリア基金 (陸軍省琉球列島援助基金、Administration, Ryukyu Islands, Army Fund) とつたアメリカ政府の軍事予算が使われた。

留学中の学生に対する金銭面での支援は、実質上、沖縄の施政権が日本政府に復帰した

後の一九七四年九月まで続いた。

アメリカ政府はいかなる政治的意図で「米留」制度を創設したのだろうか。戦後の沖縄をどのように位置づけ、どのような長期的展望に立って人材の育成を図っていたのか。どのような人々や組織が留学制度の実施に関わったのか。留学生はどのように選抜されたのか。

また、沖縄戦を生き延びた沖縄の若者は、どのような思いでアメリカ留学を志したのか。沖縄からの留学生は、アメリカをどのように見ていたのか。アメリカ社会におけるさまざまな人々との出会いや交流は、沖縄の学生にどのような自己意識及び対米意識を形成させたのか。さらに、彼ら、彼女らは帰郷後、戦後沖縄の社会形成や対米政策においてどのような役割を担ったのか。

本書は、戦後の沖縄からアメリカに留学した若者——「米留組」と呼ばれた人々——についての物語である。「米留」制度がアメリカの対沖縄統治政策においてどのように位置づけられていたのかを、アメリカの公文書館所蔵の一次史料から明らかにし、留学経験者たちのライフストーリーを通して、当事者の視点から「米留組」の軌跡を辿る。

「米留組」に目を向けることは、少なくとも二つの意味を持っている。

第一に、「米留」制度は、冷戦という世界情勢の様相を示すものであり、東アジアを中心とする当時の国際政治分析の一例となる。

「米留」制度の創設は、戦後沖繩におけるアメリカによる統治の戦略的な方法であった。沖繩の教育史においても、「米留」制度は「アメリカ統治の恩恵」と評価されることが多かった。当然、「米留」制度創設の背後には、アメリカ政府の思惑があった。

国際関係史を研究するナタリー・ツヴェートコヴァは、冷戦構造においてアメリカとソ連の留学制度に関する政策が、民主主義と共産主義という両国のイデオロギーを推進する役割を担ったことを指摘している。また、アメリカがそれぞれの国における社会的リーダーを基準に選抜したのに対し、ソ連は労働者階級の人々を留学生として迎えるなど、両国における留学生のリクルートの方法が異なっていたことも指摘している。

「米留」制度もまた、冷戦構造下におけるアメリカ統治の政治的な枠組みの中にあった。

東アジアを中心とする国際政治情勢の変化に伴い、一九五〇年に本格的に実施された「米

留」制度は、沖縄を永久的に保有するといったアメリカの意思を反映していたのである。

第二に、「米留組」の当事者の経験に目を向けることによって、沖縄とアメリカの狭間はざまで生きた人々の葛藤や想いおもを読み取ることができると。

私は、二〇〇九年から現在に至るまで、四〇名近くの米留経験者へのライフストーリーの聞き取りを沖縄で行ってきた。アメリカへの留学は、アメリカ統治という政治的な枠組みの中で形作られたものであったとはいえ、移動する個人々の経験は、その枠組みを超えた、主体的なものであった。沖縄の若者は、単に民政府の主導で「派遣」された客体ではない。アメリカへの留学は、彼らが自ら選んだものであった。その選択は、当事者にとつて、戦後沖縄の状況を生き抜くための一つの手段としても捉えることができよう。「米留組」と呼ばれた人々のライフストーリーから、「米留」制度の意味を、そして沖縄、日本、アメリカの三者の関係、さらに冷戦の時代そのものを捉え直すことができるのだ。

アメリカ文化史研究者のペニー・ヴォン・エッセンは、アメリカが一九五〇年代半ばから一九七〇年代後半にかけて実施した、自国のジャズ音楽家を「文化大使」としてアフリカやソ連に派遣するプログラムに注目している。冷戦の状況下、アメリカ政府は多くの

黒人ジャズ音楽家を派遣することで、アメリカの人種に対する寛容性を強調し、民主主義の推進を試みた。しかし、そのアメリカ政府の思惑に反して、ジャズ音楽家たちは、アフリカ系アメリカ人としての人権が無視されてきた現実を伝え、「真の自由」を求め歌ったという。そこには、国境を越え移動する彼らを単なる受動的な客体である「親善大使」としてではなく、主体として描くことでアメリカ政府の思惑に反する「予測しなかった影響」が生じたプロセスが明らかにになっている。

沖縄の「米留」制度は、アメリカの思惑通りの結果を生み出したのか。それとも、アメリカの思惑を超え、「予測しなかった影響」をもたらしたのか。沖縄の留学生は、アメリカに対してどのような影響をもたらしたのであるか。

一九四五年の沖縄戦、二七年間に及ぶアメリカによる沖縄統治、そして一九七二年の日本復帰といった世替わりを経験した「米留組」は、その時代の変化をどう生きたのか、そしてどのような言葉やストーリーで人生の物語を紡ぐのか。「米留組」のライフストーリーは、決してアメリカ統治時代に対するノスタルジーで語られるものではない。また、「被害者」や「加害者」といった分断を導く「大きな物語」に収まるものでもない。

二七年間の直接的、日常的なアメリカによる統治を経て、沖縄は日本の他の場所とは異なるアメリカとの関係を有することとなった。沖縄の人々の「核抜き本土並み」返還という日本復帰に対する願いに反して、沖縄には広大なアメリカ軍基地が残った。

震災は数十年経った今も消えることのない痕跡を心に残し、沖縄の人々の生活に影響を与えている。一九七二年の本土「復帰」から半世紀が過ぎる沖縄には、アメリカの統治が終わったとは言えない日常が、まだ存在している。

本書の目的は、戦後社会の再建を期待された「米留組」が、アメリカ統治下で、どのような葛藤や想いを抱きながら生きてきたのか、そして何を遺^{のこ}してきたのかを明らかにすることである。「米留組」のライフストーリーを知るとは、今を生きる個人々の生き方を考えることにつながる。そして沖縄戦後史の貴重な「証言」として残すことは、遺された者の使命である。